HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	触媒懇談会の発足にあたって
Author(s)	広田, 鋼蔵
Citation	觸媒, 16, 86-87
Issue Date	1959-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30428
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_P86-87.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

入によつて解決できるものと思つている[4]。触媒の活性が何次の高次現象であり，その高次エントロピーをどうして決定するかが私の取組んでいる今後の課題である。

文 献

1) 牧島：「化学」増刊,「触媒化学」昭和32年4月，61頁；触媒付論会予稿 昭和32年(東京)；工化，触媒シンポジウム (昭和32年10月号)

2) 米田，平佐，熊井，広兼，藤本，牧島： J. Phys. Chem. 投稿中

3) J. A. Wethington, Jr. T. A. Gens, W. H. Christie and A. R. Brosi： 第2回 Genève 原子力国際会議報告，15/p/937 (1958).

4) 牧島： 物理学会誌，昭和34年，No. 2.

触媒懇談会の発足にあたつて

広 田 鋼 蔵*

(Kozo HIROTA)

この世の中は，神武景気になつたり，なべ底不況になつたり，種々様々に変転していく。この様な傾向は自然科学の学界の風潮にも見受けられると思う。新実験法が発見されたり，指導的理論が出現したりすると関連学界全体が活気ずき，時にはこれがきつかけになり，独創的研究が相次いで生れ，知識の広野が急に開拓されていく。やがて広野の限界に達すると，既得知識の掘り直しが初まり，マンネリズム的研究の横行となつて学界に沈滞の時期がやつてくる。この状態は次の新しい息吹がおとずれるまでつづく。

触媒化学，広くいえば反応論の分野とて，このような運命は免れない。重水素トレーサー法の発展と転移状態理論の誕生とを指標とする1930年代前半は反応論誕生の時期といえる1900年頃以来の華々しさがあつた。その後，反応論に発展はあるにしても，その頃に比べるべき急速な進歩はみられないが，最近の状態は或いは画期的成果が現われそうといつてもよかろう。そういう世界の反応論の状態は我国にも反映しているが，戦後の特異な環境下にあつたため，やや特種な傾向が我国では認められる。触媒懇談会の運営には今後この点を考慮すべき点が多いにあるように思われる。そのような観点から，本会の機関紙「触媒」の編集に関連して私見をのべさせて頂く。

便宜上，敗戦後から現在までの期間を，次の三期に分けてみる。第1期は昭和20～25年(1945～50)の時期で，戦後の物質不足の中に，乏しい研究費で細々と研究をつづけていた頃である。その上，当時は海外の研究を知るにも限られたルートで少数の新刊雑誌をのぞきみる位であつたから，益々我国の学的水準は相対的に低下するばかりであつた。ただ，海外諸国も戦争の影響を受けて，その進歩が著しくなかつたのが幸いといえよう。したがつて，その頃研究報告には海外の新知見の吸収にもとずく成果が多かつた。当然，この期は我国触媒化学においてもつとも暗い時代であつたといえよう。

第2期にあたるのは昭和26～30年(1951～55)で，占領政策の変化と，それにつづく講和条約の発効により(1952)，研究が自主的環境で行えるようになつた期間である。それに伴い，私生活の不安の減少と研究費の多少の増加は私共の研究意識を芽生えさせたのは事実でその上各国の文献の入手と海外への研究者の留学視察は直接に海外の研究状況を察知できるようになり，どうやら正常の研究体制をとることが可能となつた。しかし我国の学的水準の低さがはつきりと認識されたのも事実であらう。この頃，海外では新実験技術が急速に発達し，触媒の研究にもその適用が開始されだした(赤外吸収法，NMR, PSR, Field Emission 顕微鏡の発達)。したがつて，このままでは益々我国の触媒化学の劣勢は絶望的ともいう状況になる可能性があつた。ただ1951年から触媒討論会が連年催うされ，触媒化学者の結集が初まつたのは特記すべきであらう。したがつて本期にまで暗黒時代がつづいていた。

* 阪大理学部 (Faculty of Science, Osaka University).

第3期は昭和31年 (1956) から現在までの時期である。この期には公私の研究機関共に研究費が段々と増し，新しい機械設備が輸入され，一流の研究機関ならば一通りの必要な研究条件が具つてきた。それに応じ触媒化学者の研究活動が盛んになつたのは申すまでもない。とすれば丁度この期に国際シムポジウムへの参加 (1956年 Philadelphia 会議への堀内教授に対する招聘) が初まつたのも偶然ではないかも知れない。それ以後のことは白明だからかくまい。

こういう経過をたどり，戦後どうなるかと思われた我国の触媒化学も一応国際協力に応じ得る状況となつた。しかし絶えず進展する世界の学界と歩調を合せていくためには，並々ならぬ努力が必要であろう。そのためには本会の指導的役割が希望されるのは申すまでもない。しかし如何なる役割を果すべきであろうか。

一般に研究の後進国では先進国の成果を吸収すれば，それだけで学的のみならず技術的水準向上において，ある程度の目的を達する。その証拠は古い明治時代まで引合に出さないでも，前述の戦後第一期にあたる頃には全ての学界にみられたことである。しかし，ある程度先進国の水準に近ずいた現在では，吸収に基づく模倣では不十分で，独創的研究により自己発展していかねばならない。しかし，それだけでよいだろうか。

すでに我国の触媒化学においても，いくつかの研究は，屢々海外の文献に引用されるが，それが大きく成長発展した例は少ない。反対に外国のある学派の出張所としての役割を果すに終つている例が多い。どの研究者でも後の例たることを望んではいないだろうが，独自の学派として発展する例が少ない所が，我国の触媒化学発展上の問題点であろう。この欠点を解消するには国内における討論を十分に行い，その成果を国内の基礎及び応用の両方で利用しつくすことである。そのためには討論会のみならず，結果を印刷物として国内誌に発表することである。触媒化学討論会では，その予稿集が年々立派なものになつて討論を面白いものとし，参加者に貢献する所が多いが，最終的報文が国の内外に散らばつているのは，画竜点晴を欠くうらみがある。現在では雑誌の価格向上とその種類の増加によつて国内誌すら各研究者は全てを見ることがむずかしい。したがつて触媒化学関係の報文がまとまつて一誌にのることは望ましいことである。こう考えると「触媒」の新運営方式は触媒懇談会として重要な意味を持つことである。それと同時に，その目的を果すため次のような性格を持つことを要望されよう……。

「掲載論文は (A) 必ずしも原報でなくともよいが，まとまつた報告に重点をおき，(B) 原則として日本語で発表すること」。

本誌の編集方針は既にこのようになつているときいているが，これが本誌新発足の目的にかなうことをここに指摘したい。(A) の理由からのべる。発行回数の少ない本誌に速報式のものを投稿する人はないだろうが，優先権獲得を目的とする報告はむしろ日本化学会の三誌にのせることを会員に認めて頂きたいと思う。その代りに触媒化学の進展に寄与するならば，少々長くても，また大部分が他誌に出たものの綜合であつても，のせたらどうであろうか。そうすれば「触媒」は我国の触媒化学全体の現状を反映する雑誌となり，基礎及び応用の両方面の研究者に役立つものとなろう。また日本化学会の三誌と役割の分化をこのように行うことは必要でもあろう。次にやや自明と思われる (B) の理由をあげたことについて少しく私見をのべたい。

明治以来，我国の学界，特に理学界の長老は外国の雑誌に投稿するか，国内雑誌ならば欧文で論文を発表し，またそれを後輩にすすめてきた。それは当時，日本語では統一的術語がなかつたという止むを得ない事情もあつた。しかし我国学界の存在を外国に認めさせるという意味もあつたろう。とすれば，これは一種のコンプレックスの表現とも富国強兵主義の思想にも通ずるともいえる。第三の理由として各人の業績を世界的に認めさせるための好意的忠告も勿論ふくまれている。実際，日本語で発表されたため，優先権が認められなかつた事実は珍らしくない。しかし我国の触媒化学向上の使命を持つ触媒化学懇談会機関誌としての本誌の発刊目的に対し，第三の理由は当然他の理由にゆずるべきであろう。誰でも欧文より邦文の方がよみ易い。欧文で理解しにくいことも日本文なら寝そべつてもよめる。我国の独創的研究が英文で発表されたとすれば，英米の学者の方がずつと容易に内容を消化し，新たな着想を得るであろう。極端にいえば，それは我国の学的水準を相対的に下げているともいえよう。勿論その結果，本誌は日化誌，工化誌，B. C. S. Japan とは可成り感じのちがうものとなろうが，それでよいではなかろうか。以上の結論は甚だ国際的協力を欠くとの御叱りをうけるかも知れないので，終りに一言すれば，これはあくまで本誌の在り方についてのことで国際協力の目的または個人の優先権の目的には，他の雑誌，たとえば日化の三誌を大いに利用すべきで，私自身大いにそうしようと考えている。

編集者から何か書くようにとの御依頼で，勝手なことをかいて或いは差し障りもあるかも知れない。しかし筆者は私見を強硬におし通す性格ではないから，御批判を頂ければ幸いである。